

2025 年 11 月 20 日

2025 年度海外認定研修「フィンランド図書館研修」参加報告書

獨協大学図書館 西村英里子

1.はじめに

今回フィンランド図書館研修に参加した目的は、以下の 3 点である。

- ・獨協大学図書館(以下「本学図書館」)で進行中のリニューアル計画において、フィンランドの先進的な図書館サービスや館内デザイン、ゾーニングの事例を参考にし、業務に反映する。
- ・大学図書館を訪問し、現地の教育やシステムを学ぶことで、日本との違いを理解する。
- ・図書館が持つ独自の雰囲気や什器のデザイン感覚を、直接体験したい。

2.研修スケジュール及び参加者

日程	訪問先
9/15(月)	ヘルシンキ中央図書館(Oodi)、アカデミア書店
9/16(火)	フィンランド国立図書館、ヘルシンキ大学図書館
9/17(水)	イソオメナ図書館、アアルト大学図書館
9/18(木)	ニッスニク小中学校、マサラ図書館、キルッコヌンミ図書館(Fyyri)

参加者：6 名（大学職員 4 名、図書館関係企業 2 名）

同行者：4 名（運営関係者 2 名、添乗員 1 名、現地通訳 1 名）

3.訪問記録

本学図書館のリニューアル計画において、ゾーニングの見直しが 1 つ課題となっていることから、以下の訪問記では「各館のゾーニング」に注目して記録していく。

【公共図書館】

◎ヘルシンキ中央図書館(Oodi)

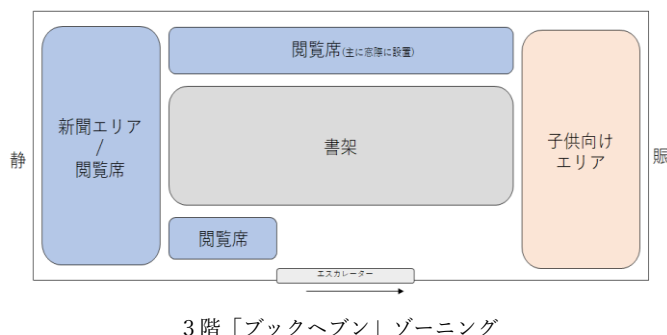
フィンランド独立 100 周年を祝うメインプロジェクトとして建設され、2019 年には国際図書館連盟 (IFLA) から「Public Library of the Year」を受賞し注目を集めた。市民が自由に学び、交流し、創造できる「市民のリビングルーム」としての役割を果たしている。

館内は 3 フロアで構成され、それぞれ独自の役割を担っている。まず 1 階は、「人々が出会う場所」として広場的な役割を果たしており、総合カウンターやチェスで遊べるエリア、カフェや映画館などが置かれている。天井部分には木材が使われており、Oodi の玄関とし

て温かみのある空間となっていた。

2 階は、「ヘルシンキの工房」というコンセプトに基づき、利用者が自ら手を動かし、創造活動に取り組める空間になっている。音楽スタジオには、本格的な機材が揃えられており、利用者はネット予約のうえ無料で利用することができる。また、3D プリンターや拡大印刷機、楽器貸し出しや調理室など、多様な機材・設備も用意されている。コピー代などは申告制で徴収されるなど、利用者との「相互信頼」に基づいた運営が行われている点も非常に興味深い。2 階は、1・3 階と比べて天井が低く、全体的に暗い色が多用されていたため、「何かに集中して取り組めるような空間」としての役割を果たしているのだと感じた

3 階は「ブックヘブン（本の天国）」と呼ばれる、開放的な閲覧空間となっている。建物を囲む大きな窓や波打つ天窓からの光が、全体を優しく包み込むような感覚であり、特に 2 階とのコントラストに圧倒された。3 階はエリアを大きく分けると、館内のエレベーターを上がって右側が子供向けエリア、中央が書架スペース、そして左側が新聞エリア・閲覧席となっていた。個人的に一番印象に残ったのは、「音」についてである。訪問前は、「騒がしい子供エリアと、基本静かに過ごす成人向けエリアが同じ階にあり、且つそれぞれが問題なく機能することは可能なのか」と疑問に思っていた。だが、天井の吸音性の高い素材により、子供たちの声が良い具合に吸収され、ある意味「BGM」のような感覚で館内に馴染んでいた。また、それぞれのエリアを建物の両端に設置して物理的な距離を取ることで、そもそも音が届きにくくなるようゾーニングされていたのも、理由の 1 つだろう。



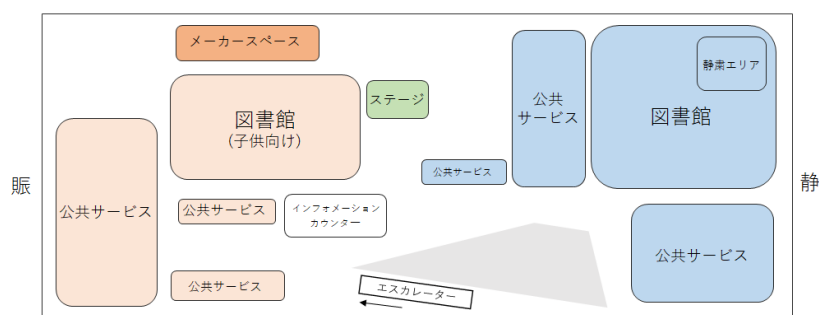
◎イソオメナ図書館

2016 年にショッピングセンター内にオープンした図書館である。行政サービス・母子保健センター・青少年相談など、約 10 種の公共サービスが提供されているエリアの中に「溶け込んだ図書館」とも言える。フィンランド国内では、Oodi に続いて 2 番目の利用規模となる。

施設内のゾーニングは、基本的に右側が成人向けのエリア、左側が子供向けのエリアとなっている。まず右側は比較的静かなエリアであり、社会保険庁の窓口、メンタルヘルスクリニック、保健センターなどの機関、そして図書館エリアが設置されている。壁で区切られた「静粛ゾーン」もあり、読書や個人学習を中心に利用者が集中できる環境も整備されていた。

左側には、母子保健センターや青少年センターなどの機関、そして子供・若者向けの図書館エリアがある。また、メーカースペースやイベントステージも設置されており、左側は活動的なエリアとして機能していることが分かる。距離や壁面の構造によって、「静か」と「賑やか」が適度に隔てられるよう工夫されていた。

イソオメナ図書館のように、様々な目的を持って来館する利用者が、互いに干渉することなく同時に存在できる環境は、ゾーニングだけで実現されているわけではなく、職員の努力も非常に大きい。職員によれば、状況に応じた利用者との積極的なコミュニケーションを常に心掛けているとのことであった。ゾーニングと職員による支援、両者が融合することで地域に開かれた公共施設として機能し続けているのだと感じた。



1階 ゾーニング



左側 子供向けエリア



ステージでのイベント



右側 公共サービスと書架が隣り合っている

◎マサラ図書館

見学したニッスニク小中学校の近くにある図書館であり、セルフサービスを導入することで柔軟な運用ができるよう工夫されている(日曜日は終日セルフサービス)。

この図書館は2階建てであったが、資料が配架されているのは主に1階部分のみで、コンパクトなつくりであった。まず入り口付近には、自動貸出・返却機が設置されており、そのすぐそばには利用者の関心を促すような新着本・特集展示コーナーがあった。特に右側の子供向けエリアは、本だけでなくブロックやパズル、ゲームも可能なPCや3Dプリンターも置かれ、まるで児童館のようだった。学校とも近く、密な連携を行っているからこそ、子供たちと心の距離が近づくような、温かみのある雰囲気が特徴的であった。そして日本では、

学校と公共の連携はあまり積極的に行われていない印象であるため、その関係性が新鮮に感じられた。



1階 ゾーニング



子供向けエリア

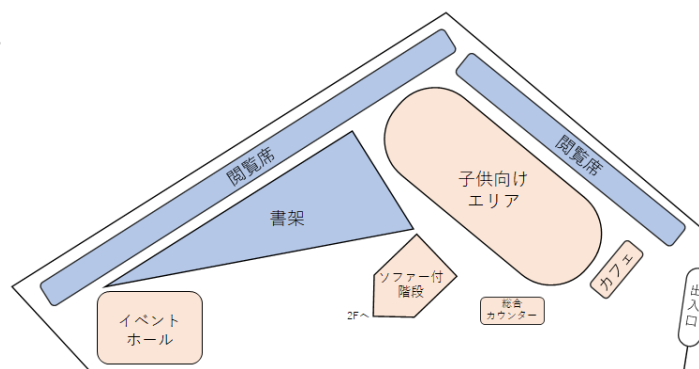
◎キルッコヌンミ図書館(Fyyri)

2020年に完成した2階建ての図書館で、青少年センターやカフェなども併設された「地域住民の交流場」としての役割を担っている。幅広い年齢層を対象とした様々なイベントも行っており、これらは普段図書館を利用しない人たちに向けた良いアプローチになっているとのこと。

1階は「集い」「交流」「情報収集」ができるアクティブなフロアである。総合カウンター、カフェ、新聞雑誌エリア、成人/子供向けの資料エリア、多目的スペース等が設置されている。建物はオープンスペース構造であるため、職員によると成人と子供向けエリアが隣り合うゾーニングにより騒音問題が出てしまっているという。「静かに利用したい大人」と「会話や活動を楽しみたい子供」とのニーズのずれだけでなく、イベント開催頻度の高さや利用目的の多様化も、そのような問題に繋がっているのかもしれない。

1階から2階へ続く広々とした階段は、ところどころ座れるようなソファにもなっており、訪問時は多くの子供たちが靴を脱ぎ、くつろぎながら勉強している様子を見ることができた。日本は、しっかりとした机と椅子に座って勉強するというイメージが強いが、リラックスしながら勉強に励む空間が図書館にあるのは、とても新鮮に感じた。こういった環境が、子供たちへの能力向上にどのような影響を与えるのかも気になるところだ。

2階には、静粛閲覧室や書架、メーカースペースなどがある。音楽スタジオもあるが、少し奥まった場所にあり且つ区切られているため、静粛性が保たれている空間であった。吹き抜けの構造は、アクティブな1階との対比を感じることができ、視覚的にデザインとしても印象に残った。



1階 ゾーニング



ソファ付きの階段



1階 閲覧席



2階 静粛エリア

※各公共図書館の事例紹介に掲載しているゾーニングマップは、自身のメモをもとに大まかな場所を示したものである。正確なフロアマップではないため、あくまでも参考としてご覧いただきたい。

【国立図書館】

◎フィンランド国立図書館

ヘルシンキ大聖堂のすぐ側にある、国内最古の学術図書館である。本館の建物は、ドイツ人建築家のカール・ルードヴィヒ・エンゲルによって設計され、1840年に完成した。のちに2年間の大規模改修を経て、2016年に現在の姿となった。国立図書館の主な役割として、「国内で発行される書籍を保管し、目録を作成すること」が法律によって定められており、紙媒体の出版物のみならず、音源やインターネットで公開された資料など、多様な媒体を保存対象としている。

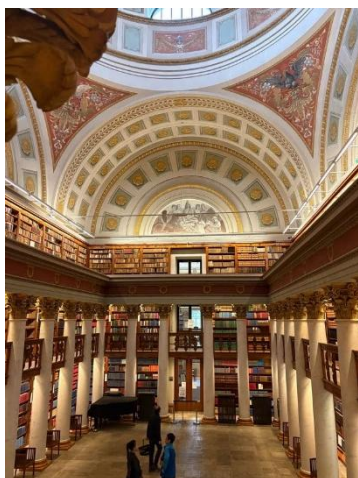
館内は、中央のエントランスホールを軸に、左右に閲覧空間が広がっているような構成となっていた。まずエントランスホールについては、館内で最も印象的な空間であった。高く開放的な天井に描かれた装飾、柱、建物の曲線など、様々な要素が合わさり醸し出される厳かな雰囲気に圧倒された。装飾には、鷲やフクロウ、白鳥など、神学・知性・清廉・学問の象徴ともされる動物が用いられ、視覚的にフィンランドの「歴史」「学問」「文化」への敬意と誇りが示されていると感じた。

左側（南）に広がる閲覧室には、研究利用向けに長期間に渡り予約して使用できるスペースが設置されている。だが夏季に増える観光客による騒音は、そのような利用者からの苦情につながることもあり、静穏性のマネジメントが難しい。「どの程度であれば発声可能なのか」を検証し、レベル別に示した案内板を設置する予定とのことだった。

右側（北）に広がる閲覧室では、備え付けの機器を使用して、マイクロフィルムやその他のデジタル資料を閲覧することができる。利用者同士が向き合うような閲覧席ではない

め、それぞれの利用者が「自分の空間」を確保しやすく、集中できる場所となっていた。

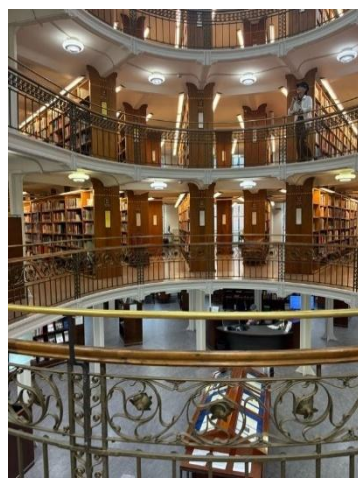
エントランスホールからさらに西につながっているのは、フィンランド人建築家のグスタフ・ニュストロムによって設計された別館ロタンダである。ロタンダは6階建てであり、中央のガラス窓の吹き抜けを中心に放射状に書架が並んでいる。カウンターや予約本の受け取り、自動貸出機もここに設置されている。書架エリアには、昔ながらのクラシックかつシンプルな木製の席も設置されているなど、資料以外にも歴史の継承を感じさせるものが多くあった。「資料保存」「研究支援」「観光対応」のバランスを取りながら、「知の継承」の場として機能していた。



中央エントランスホール



右側(北) 閲覧室



別館 ロタンダ

【大学図書館】

◎ヘルシンキ大学図書館

ヘルシンキ大学は、フィンランド最古かつ最大の規模を誇る学術機関である。学内には4つの図書館と1つのラーニングセンターがあるが、今回は4つの学部図書館を統合させ、2012年にオープンした本館「カイサハウス(Kaisa House)」を見学した。内装はコンペティションによって決められたといい、将来的な利用形態の変化を見据え、「柔軟性」を重視して設計されたとのことだった。

カイサハウスは11階建て構造であるが、そのうち8フロアが図書館機能を担っている。学習形態や音の許容度に応じたゾーニングで、会話可能なグループエリアから静粛エリアまで、学習目的に応じて空間を選択できるようになっている。

例えば、館内には色分けされた掲示がいたるところに設置されていたが、「ここはどんな場所で、何ができるのか」を学生たちが視覚的に判断できるよう、環境整備がされていた。見学で確認できた色分けは以下の通りである。

【音に関する色分け】

騒・グリーン ⇒通常の会話が許容されている。



(例：交流エリア・グループ学習室等)

・オレンジ ⇒図書館に適した静かな会話が許容されている。PC の使用も可能。

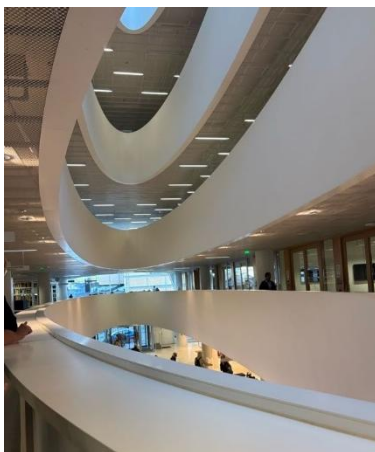
(例：読書エリア・PC エリア等)

静・レッド ⇒静粛な空間。一部のエリアでは PC の持ち込みも不可。

(例：一部の読書エリア等)



基本的に、図書館の大部分は中間のオレンジゾーンとして運用されていたが、ドアで仕切られた部屋にはグリーンやレッドゾーンを設けているようであった。空間と色の工夫により「交流の促進」と「静粛の維持」を両立させている図書館であった。



中央吹き抜け



ゆったりとした閲覧席



グループ学習席 掲示

◎アアルト大学図書館（ハラルド・ヘルリン・ラーニングセンター）

アアルト大学は 2010 年に 3 大学が統合し設立された。大学名はフィンランドの建築家アルヴァ・アアルトに由来する。図書館の建物自体は 1970 年に建てられたものであるが、2015 年の大規模な改修を経て、現在はラーニングセンターとして運用されている。改修により 4 階から 3 階構成に変更され、同時にゾーニングの見直しや紙資料の大幅な削減等を行った

とのこと。現在の年間貸出件数は、紙資料が2万件であるのに対し、電子資料は600万件とのことから、電子の利用が一般的となっている現状を知ることができた。

ラーニングセンターの構成は、地下K階から2階までの3フロアである。地下K・1階は、ディスカッションやグループ作業もできるアクティブなエリア、2階は静かに学習や読書をするエリアとし、ゾーニングを分けているようだった。

地下K階は、赤色のカーペットが印象的なフロアで、集密書架が設置されているほか、グループ学習室(以前はメーカースペース)や閲覧席が置かれていた。そこで特に驚いたのは、6人掛けなど大人数の席でも、間をあけることなく利用されていたことである。本学図書館では、基本6人掛けの席でも2〜3人しか座らないという現状があるため、「距離」「空間」の感じ方に何か違いがあるのかと疑問に思った。

そして吹き抜けに面した階段を上ると1階があり、閲覧席やグループ学習室、授業関連資料が置かれているほか、カフェが併設されていた。クッション性のある席やモバイルバッテリーステーションも設置されていたことから、長時間ゆったり作業できるような環境になっている。

2階は、地下K・1階とは異なり、吹き抜けのない区切られた空間となっているため、音が響きにくい構造である。書架には、大学の主な学部分野である、経済、テクノロジー、デザイン、芸術、建築の資料が置かれている。白・金・木目調を基調としたデザインは高級感があり、多様な閲覧席から利用者がお気に入りの場所を選択できるようになっていた。アアルト建築は「光」の入れ方が一つ特徴となっているが、上の階に行くほど柔らかい光が入るように設計されていたことから、「音」と「光」が連動したゾーニングであると感じた。



K階 壁に掘られた
ユニークなスペース



K〜1階にかけての吹き抜け



2階

【学校】

◎ニッスニク小中学校

キルッコヌンミ市マサラ地区にある、フィンランド語による基礎学校である。老朽化と室内空気環境の問題により現在建て替えが進められており、新校舎は図書館や青少年センタ

ーを含め 2027 年に完成予定とのことであった。

今回見学した仮設棟の 1 つであるアートハウスには、家庭科室や美術室、保健師・ソーシャルワーカーの部屋があった。授業の中では、クラスで読書量を競うイベントや作家による講演、電子サービスの活用等、子供たちがより読書に親しめるように学校が積極的に関与していた。幼いころから図書館の利用を促す、丁寧な環境作りが行われていることを実感した。



機能的な椅子と机



給食

【書店】

◎アカデミア書店

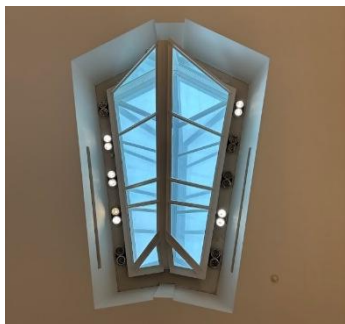
1893 年に出版社と書店が連携する形で創設された、フィンランドを代表する大型書店である。ヘルシンキの中心部に位置し、建築家アルヴァ・アアルトによる設計で知られている。特にエントランスや館内の大理石、本を開いたような形の天窓は、アアルト建築の特徴的なデザインと言える。この書店には、約 25,000 点の商品が取り扱われ、フィンランド語・スウェーデン語・英語を中心に、多言語に対応した資料が置かれている。他店舗含め、全体では 50 名ほどのスタッフが勤務しているほか、言語別に選書担当者を配置するなどし、多文化・言語に対応している。

1 階は、「利用者同士が出会い、交流できる場」としてデザインされている。入り口すぐのエリアには、現在注目を集めているもの・売れ行きの良い本が配置されているが、主にフィンランド文学およびその翻訳書が中心に置かれているフロアである。フロアの中心部分は、購入した本をその場で読んだり、待ち合わせ場所として活用できるソファ席が置かれている。その側には、著者インタビューや出版記念イベントなどを行える小さなステージもあり、55 年以上に亘ってそのようなイベントを開催しているとのこと。読者の関心を集め、足を止めてもらうきっかけを作る工夫がなされている。

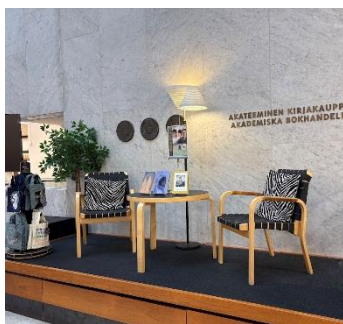
一方で 2 階には、じっくり読むことができる学術書や専門書が置かれ、利用者の探究心を促すフロアとなっている。さらにアアルトカフェも併設されていることから、長期滞在型書店としても機能している。

3 階は、現在貸出制のオフィスとして運用されているとのこと。以前は書店の事務室とし

て利用されていたとのことだったが、現在は地下にそのスペースを移している。



天窗



1階 イベントステージ



2階

4.まとめ

今回の研修を通じて感じたのは、どこの図書館でも空間の使い方に対する明確な考えが示されていたことである。「静」から「動」まで、様々な場所を区別するのは単なる利用者への周知だけに止まらず、天井の高さや形、素材、光の入れ方、什器の配置など、設計の工夫も大きく関係していることを知った。また、音が少し気になる場面でも「完全な静けさ」を求めるのではなく、その場の目的に合った「心地よい環境」を作ろうとしていた点が印象的で、本学図書館のリニューアルを考える上でも大きなヒントになった。学生が目的に応じて安心して学べる環境を整えることで、主体的な学びをより一層支援し、「多様な学習スタイルに寄り添った図書館運営」を実現していきたい。

また現地通訳の方から、フィンランドにおける本と出版文化の特色、大学の教育制度、社会状況について話を伺ったことで、図書館が国民の学びを支える基盤として長く機能している背景も理解することができた。文化・社会的な土台が、図書館の利用者主体の空間づくりや運営にも強く反映されているのだと感じた。

このように、現地での見学や職員・通訳の方からの話を通して得た学びは、自分の考えを大きく広げてくれるものであった。この研修に参加させていただいたことに深く感謝するとともに、今回得た知見を日々の業務に活かしていけるよう努力していきたい。

* 本報告書の写真はすべて報告者撮影。

【参考文献】(2025 年 11 月 17 日最終閲覧)

・ヘルシンキ中央図書館(Oodi)

<https://oodihelsinki.fi/en/>

・イソオメナ図書館

<https://www.isoomena.fi/liikkeet/palvelut-ja-toimistot/kirjasto-ison-omenan-kirjasto-espoon-kaupunki/-/672>

・マサラ図書館

<https://www.kirkkonummi.verkkokirjasto.fi/-/masalan-kirjasto>

・キルッコヌンミ図書館(Fyyri)

<https://www.kirkkonummi.verkkokirjasto.fi/-/kirkkonummen-kirjastotalo-fyyri>

・フィンランド国立図書館

<https://www.kansalliskirjasto.fi/fi>

・ヘルシンキ大学図書館(カイサハウス)

<https://www.helsinki.fi/en/helsinki-university-library/welcome-library/library-locations-and-premises/main-library-kaisa-house>

・アアルト大学 ハラルド・ヘルリン・ラーニングセンター

<https://www.aalto.fi/en/learning-centre>

・アカデミア書店

<https://akateeminen.com/>